

3131  
1

越後 鈴木牧之撰  
江戸 京水百鶴画

京山人百樹刪定

# 北越雪譜

初編

江戸書肆

文溪堂梓行

藏書

北越雪譜敘

世之農商而嗜文雅者或不知取以文雅為文  
 雅徒企羨韻士墨客之風標沈酣文酒流連志  
 月而置生計於不問以傾產業者間亦有之是  
 豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴木牧之  
 翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節  
 儉抑賭博不務誦讀於經營之中而務鈔槩於  
 會計之餘以文遠近之墨客嘗以堪忍之二字

新編  
北越雪譜  
初編  
江戸書肆  
文溪堂梓行

銘自守以故其名久布遠邑而生業亦因以致  
豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其  
實者非耶余於翁得一面識於江戶而後持以  
書訂交者有年于此今茲乙未遠寄示其所著  
北越雪譜者六卷併囑以校訂時方盛夏炎威  
如燬乃就小窗下試繙尋閱之則越雪恍如耳  
聞騷屑之聲目見紛霏之影使人頓忘瓢中之  
苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏柴米或

不給則漚然寒顫肌膚为之粟生矣余因以謂  
純袴輕薄子身當微雪俄下紛之舞空之際彫  
鞍寶勒飛玉產於郊垌或纒帽棕鞋踏瓊瑤於  
街衢或重舸載妓或高樓呼酒直以爲勝遊樂  
事曾不知飢寒為何物若令其人讀此書依以  
想其種之凍餒之苦狀乎然則安在不能省  
怪非宴安之公共而威之有生戒懼之心者哉  
寧梓有行之至有裨益世教蓋非鮮小也間者

猶得秋涼聊削之駁雜校訂方畢者三卷書賈  
文溪堂見而喜之謀梓以之レ余寄簡以告翁  
曰雪中尚戶漫筆豈敢效梓耶於是予不復俟請  
之於翁奉以付之翁之嗜文雅而能發其實以  
必笑領之而已翁之稿本國字之間濫字者嘗  
不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙云爾  
天保六年乙未秋園菊開日

江戸 京山人百樹并書



此書の稿本國ハ別冊トシ或ハ其説ハ大圖城描ト添ルモ亦至  
此皆牧之翁ガ自筆ノ草画也此筆梓行ノ為ニセシ雖ハ國ハ  
汚穢重複あり今梓ニ臨テ其國ノ過半以省キ且或新ニ  
考ルレを存トシ卷中ニ夾刺考ハ單冊ニ尽シ難ク以テ也則ハ  
是刪定ノ意ニ係ル所也余嘗テ原圖以覽キ雪中ノ瑣狀  
混錯を走墨ニ終テ通曉シ難キカ靴中ノ瘡痒亦其何如  
克唯翁ガ草圖ニ假ビ其手描ヲ而已或原圖ノ梓ニ入ルハ則  
ハ其或加シ或減有ク圖意キカ其説ニ據テ其國城作リトあり蓋余亦  
越地或踏テ越雪ノ真景ヲ於テ茫然たり故ニ雪圖ニ於テ違漏あり  
知ズル者其誤を編者ニ駁ルル勿キ乙未秋 京水百鶴



掃除積雪之圖

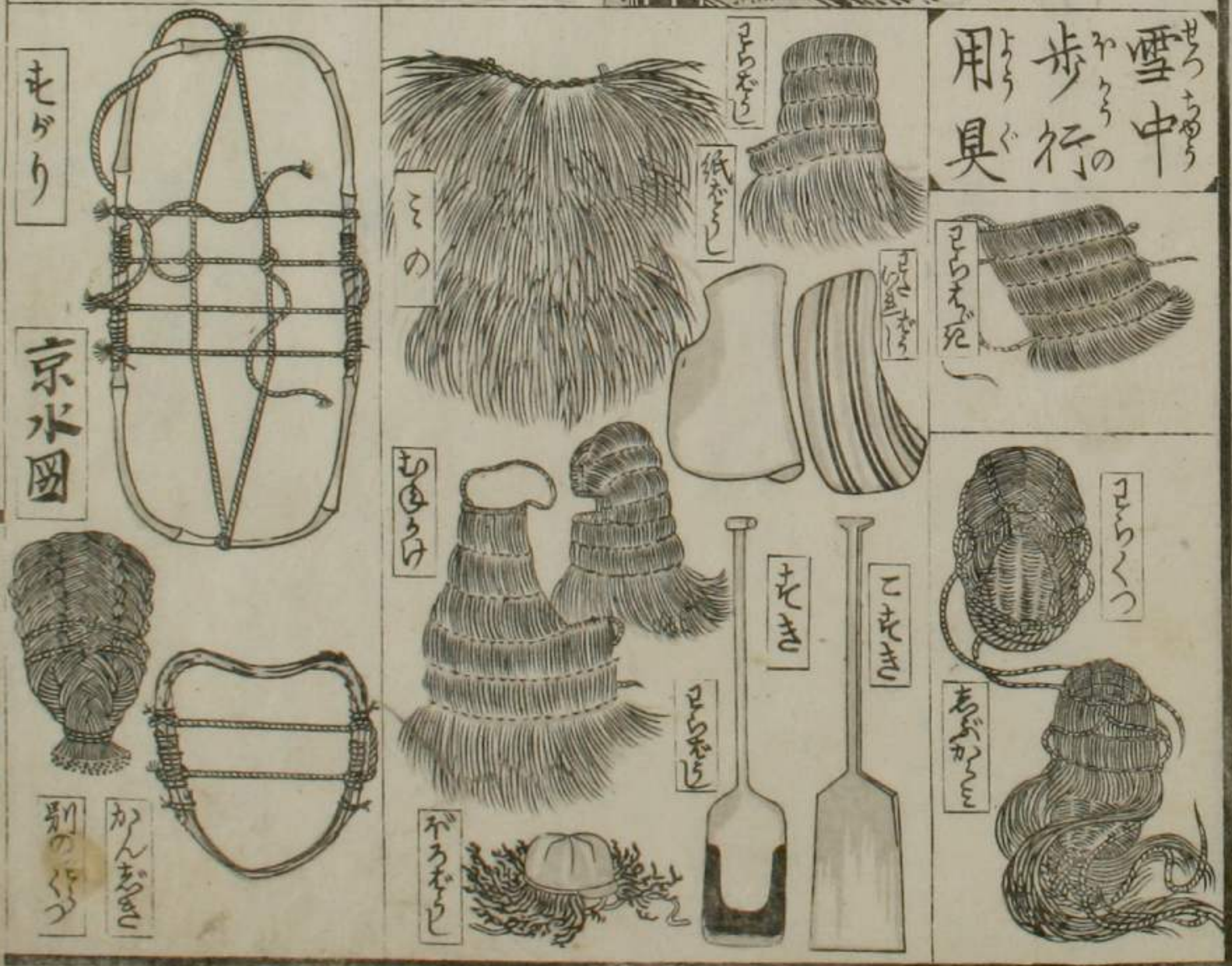


枕間簾、  
雪華飛天  
曙空未白  
四圍烟絕  
樵林人  
不見風  
淒涼徑  
犬空飢  
瀨乘冷  
斃促  
高履屐  
拂衣  
先集  
敵衣  
屋裡  
要知  
春  
老  
到  
牆  
頭  
之  
有  
早  
梅  
紅  
右賦小越雪景

江戸 解石山人 祿題

京水筆

雪中歩行の用具



屋上雪掘圖



縫を穿く雪行圖



モリ

京水圖

かんざし  
別

北越雪譜初編中上卷之上目錄

- 地氣雪と成る弁
- 雪の深淺
- 雪の用意
- 雪の堆量
- 雪を拂ふ
- 雪道
- 胎内潜
- 熊捕並白熊
- 雪中の氷
- 雪中の火
- 雪顔
- 雪の形状
- 雪意
- 初雪
- 雪竿
- 沫雪
- 雪蟄
- 雪中の洪水
- 熊人を助
- 雪吹
- 破目山
- 通計二十一條



北越雪譜初編卷之上

越後塩澤

鈴木牧之

編撰

江戸

京山人百樹

刪定

○地氣雪と成る弁

凡天より形氣爲りて下す物。雨。雪。霰。霽。露。ハ地氣の粒珠を所霜  
 ハ地氣の凝結する所冷氣の強弱によるて其形と異なる。地氣天小上騰形を爲  
 て雨。雪。霰。霽。露。電。と云ふ。温氣をうくむ水と云ふ水ハ地全體を爲元の地小  
 飯より地中深けくかき温氣あり地温るを得て氣吐天小向上騰る。人の氣  
 息のごとく昼夜庁時も絶る。天も又氣吐て地小下す。是天地の呼吸なり。人の  
 呼と吸とのごとく天地呼吸と萬物を生育之天地の呼吸常然失ふ時ハ暑寒時不應  
 せ。大風大雨其餘さぬ。天覆あり天地の病之天小九ツの段あり。九天と云ふ  
 九段の内最地小近き所を太陰天と云ふ。地城より高き四百八十八万  
 二千五百里と云ふ。太陰天と地との間小三ツの際

あり天小近を熱際とのひ中を冷際との地小近を温際との地気ハ冷際を限りと  
 して熱際に至らず冷温の二段ハ地を去るる甚く遠く富士山ハ温際を越て冷際  
 小ちるるゆゑ絶頂ハ温気通せざるゆゑ艸木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温  
 際の下小なる雷と夕立をえんきの雲ハ地中の温気より生むる物也小其起る形ハ  
 湯気のごとく水成沸て湯気の起と同トるる雲温る気成以て天小升りかの冷  
 際小い夏ハ温るる気消て雨とる湯気の冷て露とる如く冷際小い夏ハ雲散  
 して雨露の粒珠ハ天地の気中ハ在る成以て艸木の實の田成りしるハざるも氣中ハ  
 生むるゆゑ雲冷際小い雨とる雨とる時天寒甚く是時ハ雨氷の粒とあ  
 りて降り下る天寒の強と弱とよよりて粒珠の大小成り是を霰と霰とを  
 電ハ夏のりの舟地ハ寒き時ハ地気形成りて天小升る微温湯気のごとく  
 天の曇ハ是地気上騰と多けきハ天灰色をうて雲とるると曇るる雲冷  
 際小到り先雨とる此時冷際の寒気雨氷水す死力たざるゆゑ花粉を為して

下は是雪と地寒のよきとつよきとふよりて氷の厚と薄との如く天小温冷熱の三  
 際あり人の肌ハ温小肉ハ冷ハ臟腑ハ熱を同ト道理ハ氣中萬物の生有悉く天  
 地の気格小随ふ也是余ガ發明小あり予諸書小散見しる古人の説也

○雪の形

凡物を視る小眼力の限りありて其外を視るる予さき(凡人の肉眼を以て雪成るとい  
 一片の鷲毛のごとくも数も数十百片の雪花成り併合して一片の鷲毛を為し是を驗微  
 鏡小照し視るる天造の細工とる雪の形状奇と妙とる下小図を看か如く其形の  
 齊くさるるハかの冷際小於て雪とる時冷際の氣運ひとかざるゆゑ雪の形氣小態  
 ども同くさるるも肉眼のなかざる至微物也昨日の雪も今日の雪も一望  
 の白糝糊を為の下の図ハ天保三年  
 許鹿君の高撰雪花圖説小在る形雪花  
 五十五品の内ハ騰寫ゆを雪六出成爲 御説小曰「凡物方體ハ四角なる必ハを  
 以て一紙圖と山體ハ丸を六成以て一紙圖む定理中の定数証へくす」云云雪を六

の花とありし 御説を以てある 愚 按小田の天の正象方地の実位之天地の  
 氣中不活動なる万物悉く方田の形失つたは其の所以の一人の體方ふして方  
 田を田とて田とて田とて是天地方田の間不生育也夫天地の象然なるを子  
 の親小似る小相同し雪の六出する所以の物之負長教陰半教陽之人の體男ハ  
 陽の九出 頭・兩耳・鼻・兩手 女ハ十出を 兩乳あり九ハ半の陽十八長の陰之  
 且とも陰陽和令て人成爲り夫男小無用の兩乳ありて女の陰小なり女小不用の  
 陰舌ありて男小なり氣中不活動萬物此理小漏るるを 雪ハ活物小なり是とも  
 寔なる所不活動の氣あり也夫六出する形の陰中或陽小象る田形を具して  
 もあり水ハ極陰の物なり是とも一滴も及時かきつれば田形をるを落とすところ不活  
 萌あるも夫小陰小して陽の田をうらむるる天地氣中の機関定理定格ある  
 奇に妙に愚筆小尽るがや

○雪の深淺

左傳小隱公平地尺小盈を大雪と爲と見えたる其國暖地なり唐の韓愈が雪  
 を豊年の嘉瑞とらひも暖國の論にさまで唐土小も寒國ハ八月雪降り五雜  
 組小入るる暖國の雪一尺以下なる山川村里立地小銀世界をか雪の飄翻  
 たるを觀て花小論玉小比勝望美景を愛し酒食音律の樂を添画小寫し  
 詞小つと稱觀する和漢古今の通例なるも是雪の淺き國の樂を我越後  
 のごとく年毎小幾丈の雪を視む何の樂きやらん雪の爲小力を尽し財を  
 費し千辛万苦する下小説く所を視てかひざる雪

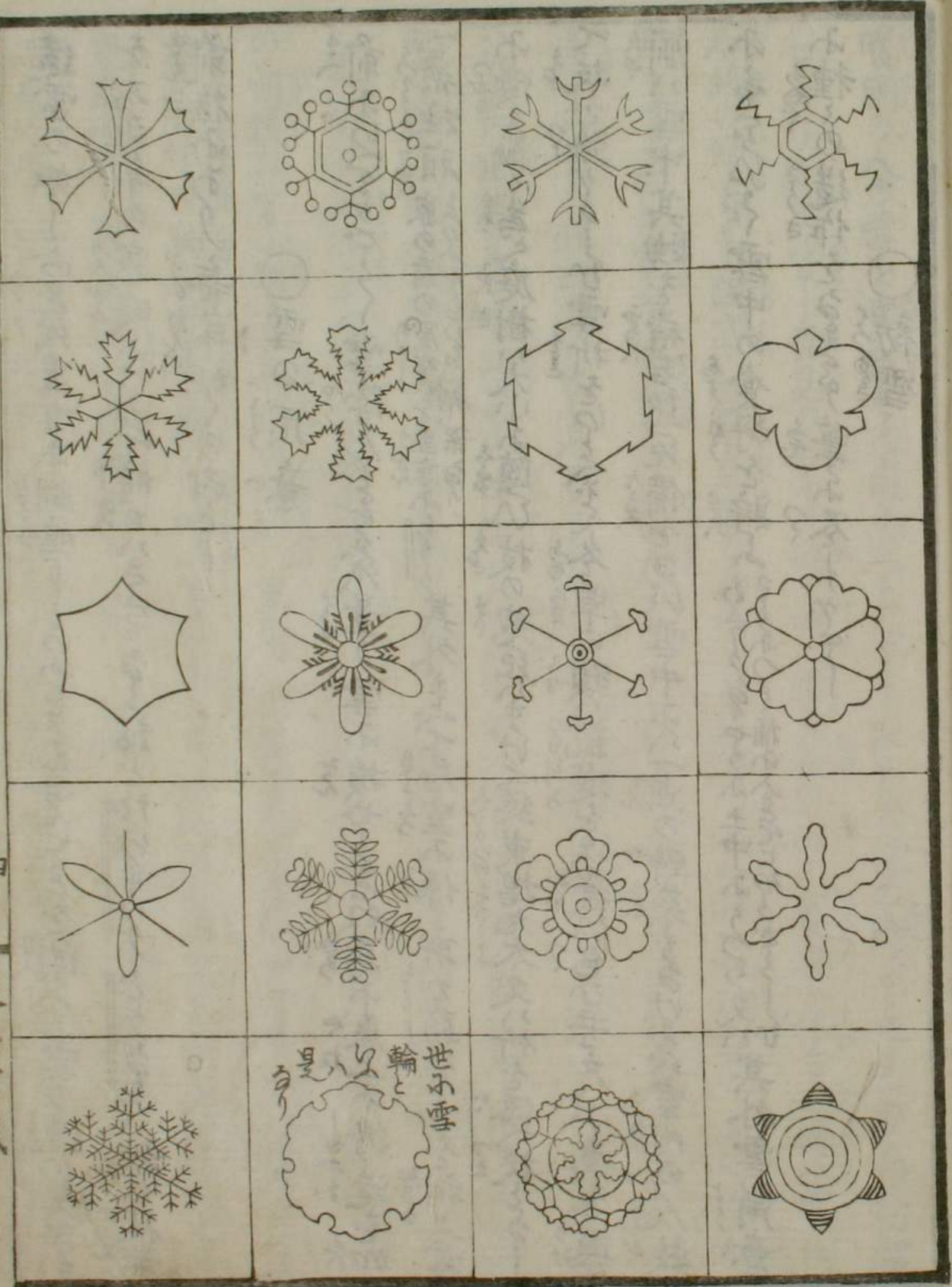
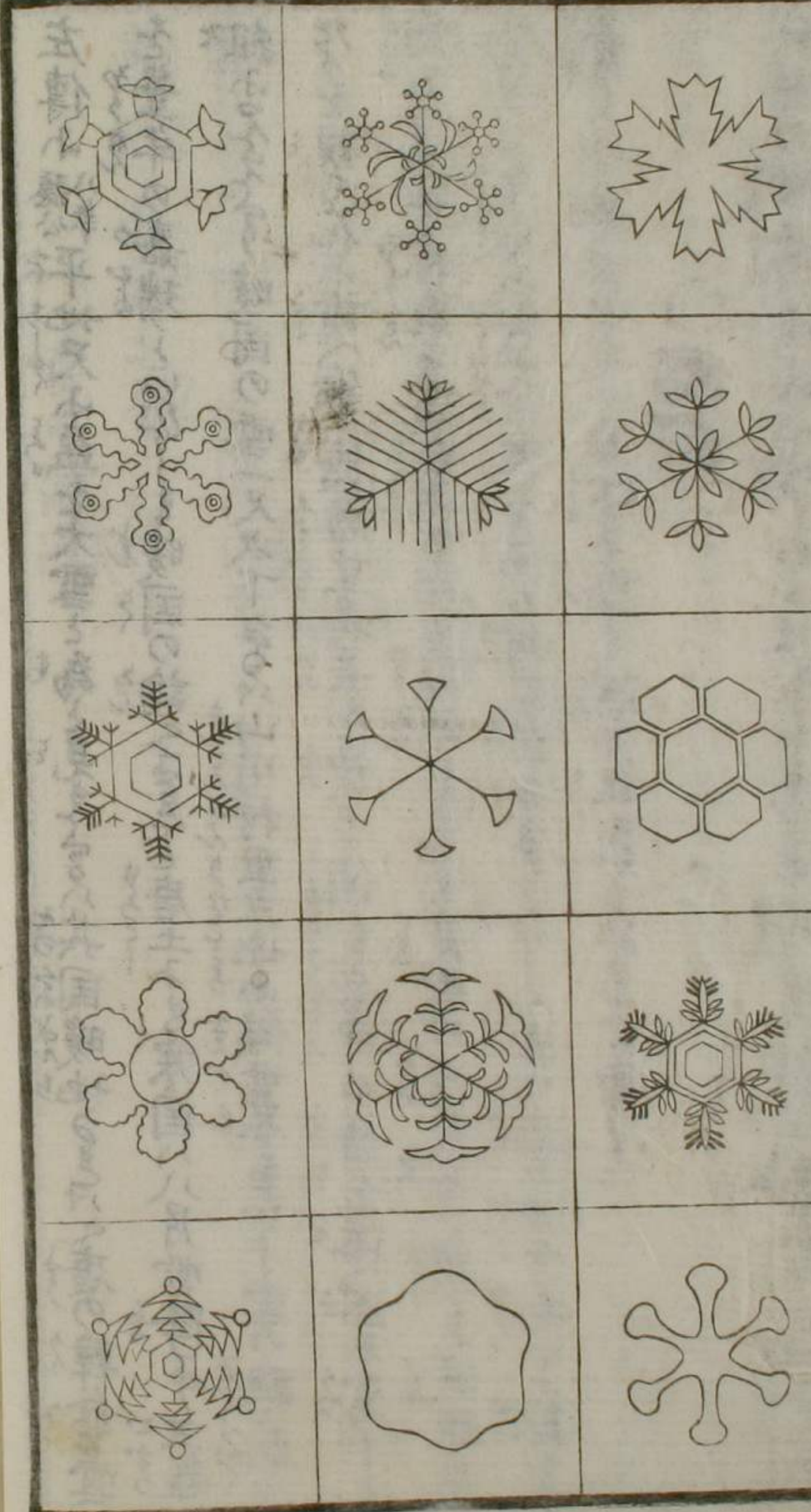
○雪意

我國の雪意ハ暖國小均しかるは九月の半より霜を置て寒氣次第小  
 烈く九月の末小至ハ殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落し天色雲とて日の光  
 看ざる連日は雪の意ハ天氣朦朧言り數日小く遠近の高山小白を点ト  
 て雪を觀せしむは里言不嶽廻ると又海ある所ハ海鳴り山やさ処ハ山ある



○驗微鏡を以て雪状を審み視る圖  
 此圖ハ雪花圖説の高撰中ハ在る所五五高の  
 内を驗寫し是別ハ五の雪之方里を以て  
 紅毛の雪も此小同。凡物の事高撰中ハ  
 詳く以て天の无量なるを知らん

天機凡々百花中六出奇詭別示工  
 洋雪言篇第拾冊茲抽珍図厚  
 高凡 題雪花圖 收之 四



世の輪  
 見

遠雷の如くあま代里言小胸鳴りとのてをを聞く雪の遠くうさる  
をある年の寒暖ふつとして時日ささるる種どたけまうりとうり秋の彼岸  
前後ふあり毎年かくのおと

○雪の用意

前ふりくごごく雪降んとする分量り雪小損せしめぬ為小屋上小修造を加  
梁柱廂家の前の屋翼を里言ふらうり其外きて居室小係る所力弱いことを補ふ雪  
小償まざる為庭樹大小小随ひ枝の曲はまげて縛束楢丸太又竹を添杖とす  
て枝を強くすむ雪折をいとを冬草の類荒庭を以覆ひ包む井戸小屋を懸  
厠ハ雪中其物を荷まむ死備をまひ雪中ハ一点の野菜もまけむ家内の人教  
小あふひく雪中の食料を貯ふあつあつ小土中ふらうり又ハ其外雪の用意  
小種々の造作をまざる筆ふそりぐて

○初雪

暖国の人の雪を賞翫をへ前ふりくごごく江ノ雪の降る年もあま代初雪  
ハこもこも小美賞一雪見の船小哥妓を推し雪の茶の湯小賓客を招き青梅ハ雪吹  
居統の媒とす酒亭ハ雪を來客の嘉瑞とすハ雪の為小種々の遊樂をまざる杖  
擧ぐり雪を賞中る甚ハ六瓣花のまうりハ所々雪国の入るを見てもを聞く  
羨まらるる我國の初雪を以てこもこも小比を樂と苦と雪泥のちひ之をもく越後国  
ハ北方の陰地るまとも一国内陰陽を前後をいんとうをも天ハ西北小たさばも小西  
北を陰と地ハ東南小足すも小東南を陽と守越後の地勢ハ西北ハ大海小對して陽氣  
と東南ハ高山連りて陰氣と由多小西北の郡村ハ雪浅く東南の諸邑ハ雪深く是陰陽  
の前後をさる小似たり我住魚沼郡ハ東南の阴地とて巻機山。苗場山。八海山。牛ヶ  
嶽。金城山。駒ヶ嶽。免ヶ嶽。浅州山等の高山其餘他国小聞えさる山ハ波濤のごとく  
東南小連り大小の河も縦横をさ陰氣充滿して雪深き山間の村落もさハ雪の  
深をまざる内ハ北ハ寒く南ハわらわると同道理と我國初雪を視るる遅と速とハ

其年の氣運寒暖つゞて均々びとらどもかそ初雪ハ九月の末十月の首小あり  
 我國の雪ハ鷲毛をうらみ降時ハうるは粉砕をるを風又て息を助く故ハ一晝夜  
 小積所六七尺より一丈小至る時あり往古より今年小ゆるる心此雪此国小降るる  
 るさまは暖国の人のごとく初雪を觀て吟詠遊興のさあさあ夢もあらず今年も  
 又此雪中小在るるか雪成悲ハ邊郷の寒国小生る不幸といへる雪を觀て樂む  
 人の鯨魚の暖地小生る天幸を羨まらんや

○雪の堆量

余が隣宿六日町の俳友天吉老人の語小妻有庄小あをび一頃聞一ふ千隈川の邊の雅  
 人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下る毎小用意ある所の雪を尺をりて  
 量りし小雪の高さ十八丈ありしといひしを此語雪国の人を信じざるか人もつ  
 らしく思量小十月の初雪より十二月廿五日までをその日数八十日の間小五尺の雪を  
 四丈小ゆるる隨て下ハ隨て掃ふ処ハ積でるるなり又地小あま減もさるる

かまをりて是をちを我國の深山幽谷雪の深るるよりあまらば天保五年ハ我國  
 近年の大雪なりしゆ右の語誣ふべし

○雪竿

高田御城大手先の廣場小木を方小削り尺を記し七建のふ是を雪竿と云ふ長一丈と  
 雪の深淺公税小係るを以てさる高田の俳友根石子よりの春翰ハ天保五年雪竿を  
 尺をさる當地の雪此節一丈小餘りといひ来り雪竿と云ふを越後の事とて俳  
 句ゆもつえさる此国小於て高田の外无用の雪竿を建る処昔ハさる今ハさる風  
 雅をりて我國小遊人雪中を避て三夏の頃此地を踏む越路の雪をさる然る小  
 越路の雪を言の葉小作意ゆえたさるありて我國の心ゆハ笑ふべし多し

○雪を掃ふ

雪を掃ふ落花をさらふ小對して風雅のつと一和漢の吟咏あまらるる事とも  
 かる大雪をさらふ風雅の状小あまらる初雪の積りしをそのまふかけハ再び下る

雪を添へて一丈ふあまるるもあまば一度降バ一度掃ふ雪浅けき是を里言ふ雪掘との土を掘ごとくちりちりきりきりちりちり掘ぎちりちりバ家の用路を塞ぎ人家を埋て人の出へきとこ処ところもろく方強家も幾万斤の雪の重量おもた推碎んをおとちりちり家とて雪を掘ちりちりるちりちり掘るちりちり木老作りまきるちりちり鋤ちりちりを用ふ里言ふまとちりちり則木鋤と掘との木をちりちりつてちりちり作る木質まのちりちり輕強と折ちりちりるちりちり且輕形ちりちり鋤ちりちり似て又廣ちりちり雪中第一の用具ちりちりとちりちり山中の人ちりちりを作りて里小賣家毎ちりちり貯ちりちりるちりちり雪を掘ちりちり状態ちりちり圓ちりちりわちりちりるちりちりるちりちり如ちりちり掘る雪ちりちり空地の人ちりちり妨ちりちりるちりちり処ちりちり山ちりちりのごちりちり積ちりちり上ちりちりるちりちりを里言ふちりちり掘ちりちり揚ちりちりとのちりちり大家ちりちりハ家夫をちりちり冬ちりちり七ちりちり力ちりちりたちりちりるちりちり掘夫を備ちりちりハ幾十人の力を併ちりちりて一時ちりちり掘ちりちり尽ちりちりるちりちり事を急ちりちり小為ちりちりるちりちり掘る内ちりちり中ちりちりも大雪下ちりちりり立地ちりちり小堆ちりちりく人ちりちり力ちりちりふちりちりるちりちり掘るちりちり費ちりちりむちりちりるちりちり男女をちりちりのちりちり一家雪をちりちりるちりちり吾里ちりちり小ちりちりるちりちり雪ちりちりやちりちりるちりちり処ちりちりハ皆然ちりちりるちりちり此雪ちりちりのちりちり力をちりちりつちりちりひちりちりるちりちりのちりちり錢ちりちりを費ちりちり終日ちりちりりちりちりるちりちり跡ちりちりハその夜大雪降り夜明ちりちりてちりちり又ちりちり元ちりちりのことちりちりハ時ちりちりハ主人ちりちりハちりちり下人ちりちりも頭ちりちり

を低ひて歎息なげきをつつくつの大低雪たいふふるるここ掘掘るる里言り言り一番掘い二番掘にととのの小

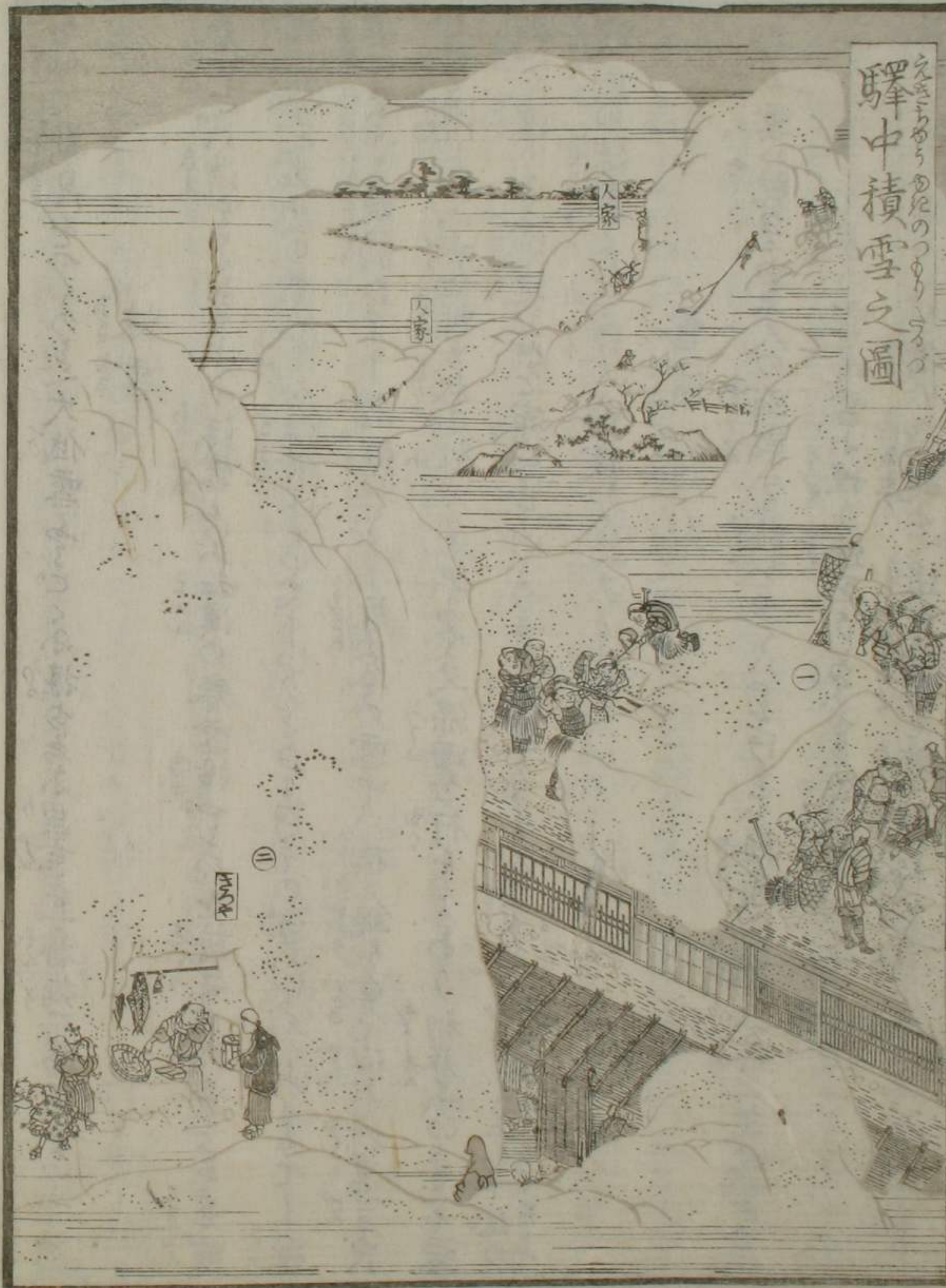
○ 沫雪

春の雪はるハ消きゆゆききををりりつつて沫雪うのの和漢わの春雪はる消きゆゆききを詩哥しの作意さくとと是暖これ国このの多た寒国さむの雪ゆきハ冬ふゆを沫雪うとといいふふるるいいんんとといいふふるる冬ふゆの雪ゆきハはつつりりてても疑うたが凍こととろろくく脆弱ちりろろろろ於泥かのごご故ゆふふ冬ふゆの雪中ゆきハは橋はし紐ひもを穿くて途みちを行ゆ里言り言りハ雪ゆきを漕こぐぐハ水みづをを渉わたるる杖つえハ似にるるももああやや又深田ふかを行ゆるる初春はつハは雪ゆきをを悉ことごとく凍こりり雪途ゆきハ石いしを布ぬるるこころろもも往末むかし冬ふゆよりよりハ易やすくく暖国ぬるの沫雪うととハ氣運き運んの前まへ後のちハはののおおとと

○ 雪道

冬の雪ふゆハ脆ちりろろもも人ひとの踏固ふみるる跡あとををりりつつてハはををけけままと往來あの旅人たび一宿ひとの夜大雪降よるるららかかららるる一条いの雪道ゆき雪ゆき小埋こり途みちををりりつつてハは郊原の小この方位かたををりりつつてて此時このハ里人さと幾十人いくを備そなへへ持もちち紐ひもをを踏ふ開ひらきき跡あとハ隨したがて行ゆハ此費この幾いく錢せんを費つを

驛中積雪之圖



理家大雪歌年  
年慣習多先不  
恨天梅柳未妻  
三月尽去在  
深代傳妍  
鈴木牧之題

牧之



京水筆

一 人家の雪を掘る事本  
文ありとこと二 雪をやりて  
洞のごとくは 柳も其まゝに  
雪皮作り物を賣る事あり  
やとあり三 園中山の如き  
取る雪あり

ゆゑ負しき旅人への道をひらきを待て空く時を移り健足の飛脚といふとも  
 雪途を行ハ一日三里小過を越ゆ足自在なる雪膝を越るも冬に雪中一ツ  
 の歎難之春ハ雪凍て鑛石のごとくさるる雪車又雪舟の字を以て重を乗せ里人ハ雪  
 車小物をのせかきものりて雪上を行る舟のごとくも雪中ハ牛馬の足立るゆゑを  
 雪車を用ふ春の雪中重を負しゆるる生馬小勝る雪車の制作別小記を形大小雪国の便  
 利第一の用具と云ふも雪凍りたる時ハあつさるる用ひごとくゆゑ小里人雪舟途と  
 唱ふ

○雪蟄

凡雪九月末より降をりて雪中ハ春を迎正二月ハ雪尚深一三四の月ハ至りて  
 次第解五月ハゆるりて雪全く消て夏道とる年の寒暖不よりて 五月ハゆるりて春の  
 花も一時ハゆるりてさるる雪中ハ在るる凡ハ一月一年の間雪を看ざるる僅小四ヶ  
 月も全く雪中ハ蟄るハ半年と云ふを以て家居の造りハさるる萬事雪を御

ぐを専と財を費力を尽さるる紙筆小記ごとく農家ハ冬と夏と秋の  
 末までハ五穀をも收るゆゑ雪中ハ稻を刈りあり其忙さるる千辛万苦暖国の農業ハ  
 比を百倍と云ふとて雪国ハ生る者ハ幼稚推より雪中ハ成長と云ふ急寒中の辛辛を  
 あつさるるごとく雪を雪ともあつさるる暖地の安居を味さるる女ハさるる男も十人ハ  
 七人ハ是と云ふも住ハ都とて競花の江戸奉公さるる年ありて後雪国の故郷ハ飯  
 る者あまも又十人ハ七人ハ胡馬北風ハ嘶き越鳥南枝ハ巢ふ故郷の忘るる世  
 界の人情と云ふ雪中ハ廊下ハ雪垂をわたりて下ハ雪吹をわたりて窓も又  
 こそを用ふ雪ふるる時ハ巻て明をよる雪下り盛る時ハ積る雪家を埋て雪と  
 屋上と均く平ふり明のさるる處さるる昼も暗夜のごとく燈火を照して家の内ハ夜  
 昼をわたりて漸雪の止る時雪を掘て僅小窓をひき明をひく時ハ光明赫奕する  
 佛の国ハ生るる此外雪籠りの銀難さるるあまもどくどくけきをさるる雪  
 鳥獸ハ雪中食无をさるる雪浅き国ハ去るるあまもど一定さるる雪中ハ籠り居て



大勢の男ども手く小木鋤をくげ雪を越水を渉て声をあげてく末了るる  
 水揚せざる所の者どもく小馳あつまりて川筋を閑き水を落さんともく闇夜ゆく  
 せぐるんえをく女童の泣叫ぶ声或は遠く或は近く聞もあはるのありさる燃  
 残りたる炬ツをたより人馬も首さけ水小浸り漲るるをわたりゆく馬を助  
 んともく帯もせざる女片手小兒を脊負提灯を提て高処へ逃のびゆく  
 せぐるあはるふん命とつりぐるをくも取くはあはる可笑事  
 可憐なる可怖き極く筆小冬くく東雲の傾小至り  
 て氷も落りて諸人安堵のあひをさるぬ○そもく我郷雪中の洪水大く  
 初冬と仲春とあり此関との驛は左右人家の前道づの流あり末魚野川へ  
 落る三伏の早も乾くゆり清流水もあふ家毎小此流を以て井水の代り  
 ありも桶ゆても汲へ流るる平日の便利井よりもなる小勝りあり初雪の  
 後十月のころまでふあの一の二條の小流雪の為小降埋り流水ハ雪の下小あり故

小家毎小汲へき程小雪を穿て水用を弁すこの穿る所も一夜の雪小埋らるる  
 あまを再うぐるり屢あり人家小ちり流さかのぐるる二條の流の  
 水源も雪小埋り水用を失ふのるる水あがりの懼あるゆゑ所の人力を併て流  
 のかり口の雪を穿るるりさすも人毎小業用小さく時を失ふる又ハ一夜の大  
 雪小かの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る驛中ハ人の往來の為小雪を踏へ  
 して低ゆゑ流水漲り来り猶も溢て人家小入り水難小逢るり前小ゆるるる  
 幾百人の力を尽して水道をひらぎ家財を流し或ハ溺死小ありあり○又  
 仲春の頃の洪水ハ大く春の彼岸前後ハ雪の消ず山ハさるる田圃も渺く  
 する曠平の雪面も枝川ハ雪小埋り水ハ雪の下を流る大河といふも冬の初より  
 岸の水まぐ氷りて氷の上小雪をつりせつる雪もあはる氷りて岩のこく岸の  
 氷りたる端次第小雪ありつりのらあ兩岸の雪相合して陸地とあはる雪の地と  
 ありさて春を迎て寒気次第小和るる手の暖気小つきて雪も降止るる二月





京水集

京水集

十二

八八



雪中洪水之圖

雪詩卷之上

文澤堂

頃水気ハ地氣よりも寒暖を知るゆへに氷の水面ハ積り雪下より解き凍り雪の力も水も凍り流ハ雪ハ塞ぎて狭く流るゆへ水勢も急ぐ烈く陽氣を得ず雪の軟ある下を潜り堤のきまごころ壁ふいふ寝耳水の災難ハあつて雪中の洪水寒国の艱難暖地の人憐れり右ハ其一をいふと雪中の洪水地勢ふより種々あり詳ハ弁トグ

熊捕

越後の西北ハ大洋ノ對して高山ヲ東南ハ連山ノ巍として越中上信奥羽の五ノ国小跨り重岳高嶺肩を並ぶ数十里をのびゆ大小の獸甚多此獸雪汝避る他國去るもありささるもあり動きて雪中穴居する熊の熊膽ハ越後を上品と云雪中の熊膽ハささるふ價貴其重價を得んと欲て春暖を得て雪の降止るころ出羽ありの臍師ども五七人心を合せ三四足の猛犬を牽き米と塩と鍋を貯水と薪ハ山中在る不随く用をさし山より山を越登ハ獵て獸を食

一夜ハ樹根岩窟を寢所とし生木を焼て寒を凌且明と著てささるく寢即をる以頭より足ふゆるまで身を着る物悉く獸の皮を以ててをを作る遠く視る猿小て顔ハ人也金革を衽むと人々をさし此者ハ志野ハ我國の熊ふありさ我山中入り場所をを見立木の枝藤蔓を以て假ハ小屋を作りて身を居所とすもの大を牽四方別く熊を窺ふ熊の穴居る所を認ハ目幟をのりて小屋ふより一連の力を併せてを捕るその道具ハ柄の長さ四尺半りの手鎗或ハ山刀を薙刀のごとく小作りするもの銃炮山刀斧の類ハ刀鈍る時ハ貯ハる砥を以て自研ぐ此道具も獸の皮を以て鞆とる此者ハ春ハもかぎて冬より山ハ入るをりもあり

そもく熊ハ和獸の王猛くして義を知る菓木の皮虫のものを食てて同類の獸を喰ハ田圃を荒れ稀ハ荒れを食の尽る時ハ詩經ハ男子の祥と或ハ六雄將軍の名を得るも義獸と云ハる夏ハ食をのりての外山嶺を掌中ハ擦着冬



道を以て得べし道を以て得べし

又上の覆ふ所ありてその下は雪のつらさを知り土穴を掘り糞もわり然るどもともども雪三五尺の吹積の熊の穴ある所の雪はうらやみ細孔ありて管のことこそ熊の氣息あり雪の解る孔の獵師こそをえまは雪を掘り穴をあけ木の枝葉のものを穴に挿しは熊こそを探りて穴に入るかくまはるるまはくまはくまは穴通りて熊穴の口より時鐘かき突たりとまはば数足の猛犬もどく飛かして鬻つて犬八人を力と一人の犬を力とて殺もあり此術は控木ふりりするまはまらるる

○白熊

熊の黒い雪の白ごとく天然の常るまども天公機を轉して白熊を出せり天保三年辰の春我々住奥沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫八邊山不入の時にふりて白き兎熊を獲り世に珍とて飼ひてふ香具師師の古風なるもの

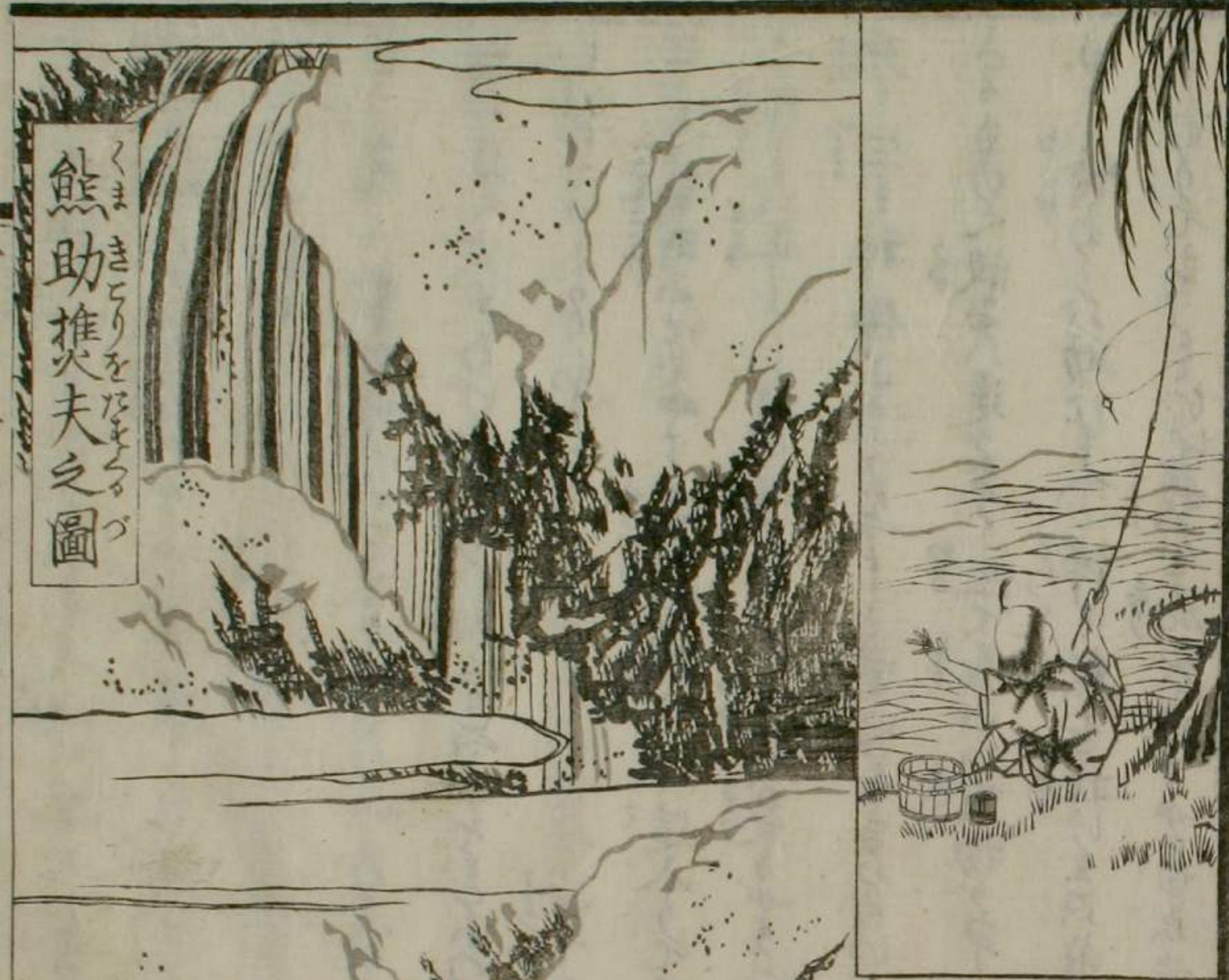
こまを買ひては市場又ハ祭礼をて人の群る所へて看物ふせりある所也余もつるふ大さ狗のことく状は全く熊ふて白毛雪を欺きまも光澤ありて天鷲織のごとく眼と爪ハ紅くよく人ふ馴るるまらるる愛へたものこそかこ小持あるまらるる終をまらるる白鳥の改元白鳥の神瑞八幡の鳩源家の旗まらるる白きハ皇国の祥象ありて天機白熊をいごまも昇平万歳の吉瑞也山家の人の話ハ熊を殺して二三足或ハ八年歴る熊一足を殺し其山うらやまを荒るるあり山家の人こそを熊荒とのみか多小山村の農夫ハ鬻りて熊を捕りてとらへ熊ハ霊ありて事古書ありてえたり

○熊人を助

人熊の穴ハ隊士ハ熊ハ助らまらるる話諸書ハ散見まらるる其地をまらるる人の語りハ珍けまらるる記也○余若うりて時毒有の庄ハ奥沼郡の内ハ在り用ありて西三日逗留せし事ありて頃ハ夏なりて多客舎の庭の木うけふ

筵をたきき納涼居小主人ハ酒を好む人也酒肴をく小園余ハ酒をバ  
 嗜むるゆゑ茶を喫り居り小老夫と小来り主人を視て拱手礼をな  
 後園(行んとせ)を主呼とめ老夫を指すの多う此由父ハ壮年時熊不助られ  
 くる人ハ危き命をたせり今年八十二まで健小長生するハ可賀老人ハ識面  
 ありゆゑとの小老夫莞爾とて再々んと余よびとめ熊不助らまると珍  
 説く語りて聞せゆといひ小主人余が前小在茶盤をとりとま一盃喫と  
 酒を満盃とつきけま老夫筵の端小坐酒を視て笑をふと続三盃を  
 喫一盃鼓とて大小喜びさるハ話説やせん我廿歳二月のそめ新をととんと  
 雪車を引く山小入り小村小ちり所ハ留伏つてとととあも足場わり  
 ゆゑ山一重踰るると小薪とまて柴あまありゆゑ自在小伏より雪車哥  
 うさひるる徐々東雪車小積と縛つけ山刀をさしと低小随り今来り  
 方(乗下り)る小一束の柴雪車より轉ひ落谷を埋る雪の裂隙小をさり

凍り雪陽氣を得たるゆゑ捨て飯も惜まざるとの所ふり柴の枝小  
 裂るる常と なるゆゑ捨て飯も惜まざるとの所ふり柴の枝小  
 手をりけり引上んととととふも動小落る勢小撞いまるるんさる重  
 くとり引上んと匍匐して双手を延一語けり上んととと時足小踏力  
 ありゆゑおのまがらう小己が躰を轉倒雪の裂隙より遙の谷底墜けるか  
 雪の上を淨落るるゆゑ幸小疵けりけむと夢のやうとととやうと小心付  
 上をたぎる雪の屏風を建るるごとく今も雪類やせんと下小あつと  
 生る心地ハあつ暗くとととせめて小明方小いんと雪小埋る狭谷間をつひ  
 やりく小一ハ空を見り所ふりりり小谷底の雪中寒烈ととと手足も龜手  
 一歩もたぎるごとくかくて小凍死ととと心を励一猶途もあつと百歩をり行  
 くとけん滝ある所ふりり四方をるる小谷間の途極むと甕小落る鼠のごとく  
 いらんとととせんまはつ惘然ととと自せまういらせんといふ思案さ出さるたそ  
 是より熊の詰今一盃ととととと自酌てととと小喫腰より烟艸巾を



熊助推夫之圖

至普卷之上



老農の生活の事

至普卷之上



宗水茶



收之茶

十七

至普卷之上



至普卷之上

いづて煙を吹きかきぬるも其次いづちとてうづもけきば老父曰まて傍を見よ  
 潜びたやどの岩窟ありの中よ雪もあはれぬ多きゆりて見えぬまをて温之此時あり  
 うづもく腰をさぐりてうづも握飯の弁當もいつちかてうづもかてくつて飢死を憂へ  
 さりながら雪を喰ても五日や十日命あはれその内より雪車哥の声を聞まは  
 村の者大聲あげて叫らば助かまへてをさふつけても伊勢さぬと善光寺さぬを  
 かこのまやよりうづもくとまきりか念佛唱大神宮をゆり日もくまかりしゆも  
 こを寢所せまると闇地を探りて這入りて見えぬ次第温之猶も探りて手先  
 小障へ正熊愕然と覺悟をきりぬる小熊どの我ハ新より未り谷落  
 死も生も神佛もまらまへと覺悟をきりぬる小熊どの我ハ新より未り谷落  
 なるもの飯ゆ道がうて生て居ぬ喰物さうとて死に命を擧て殺ばらば  
 情あはれ助なまると怖と熊を扶けまは熊へ起るなりさやうゆてありしがま  
 ありてまをていづ我を尻ゆかかやぬ熊の居る跡(坐)ふとのあうらうら

る巨燧あつてごとく全身あつてまらて寒をこらまへてぬる熊ふまへて礼を  
 の猶もなまけ玉と種と悲しぬるをいひぬ熊手をあげて我ハ口柔ふか  
 あつてるなびくとぬる城のるをいひぬていづ甘くてまて苦く売  
 りふらぬまて心爽ふさう咽も潤ひぬ熊ハ鼻息を鳴へ寝やうとて我を助  
 るんと心大ふまらつきのち熊と脊をうづて卧し宿のるをいひて眠る  
 つづいといひてのちいつつ寝入りかた熊の身動をきつて目あめて穴の  
 口あはれぬ夜の明も然あり穴をいひぬるやうに道もある山ふのびる  
 藤づつてまもあつてつちこちをさぐりて熊も穴をいひて滝壺にうり水をの  
 一時とめて熊を見まは犬を七つもよせるとどの大熊又の窟のりゆも  
 我ハ窟の口居る雪車哥のこゑやまると耳を澄て聞居たりて滝の音の  
 めて鳥の音もまらびとの目もむるく暮るく又穴一夜をあはれ熊の掌ハ肌を  
 まのた幾日かてま哥はまらびとの心細きゆりゆらまらまらと熊ハ次第小馴

可愛り〜と語り〜主人ハ微酔老夫ハ其熊ハ牝熊デハ〜  
 人大ハ小笑ハ又酒をのませ盃の献酬ハ〜  
 老夫曰人の心ハ物ハ〜  
 雪消る〜木根岩角ハ〜  
 谷間の雪のまゝ〜  
 日のあつる所ハ我を捫テ〜  
 何方ハ〜  
 顧テ走り去テ行方志マシ〜  
 のハ〜

踏所も〜火點頃宿〜  
 此時近所の人〜  
 新〜  
 仔細小語り〜  
 語り〜

雪中の虫

唐土蜀の峨眉山〜  
 雪消終バ〜  
 謂蛆蠅〜  
 ハ雪中の蛆蠅也木ハ土金水の五行中皆生〜





も貧乏くじ善男をもち良姫をむく好孫をまうけりとして一村の人と常不淡多り  
 かき善人の家小天災を下ち如何をや○かくて産後日を歴てのち連日の雪  
 も降止天氣穏る日姫夫小むひ今日親里(行んとあふいりやせんとの男  
 旁小ありてちよ上る男も行下(実母も孫をさそよろふせ夫婦しと自  
 慢せよとい小娘いらちあつて姑小かくとい(小姑の俄小土産るど取をうへ間小娘  
 髪をゆひるどして暗の衣類を着し綿入の木綿帽子も寒国の習とて見小く  
 うら小兒を懐小いざ入んとする小姑身よりよく乳を吞せいでいたはよ途小  
 て小福ん福のさゆくうらんと一言の詞も孫を愛も情もあつてさう夫ハ蓑笠立  
 橋脚衣をんを穿晴天即も蓑を著ハ土産物を輕荷小擔ハ兩親小暇ををり  
 夫婦袂をつら福喜躍て立出たり 正是親子が一世の別と後の悲難とあり  
 けり○さるやど小夫ハ先小立妻ハ後小あさひゆくをいつまふい今日頃目の  
 目扣よりこそかひひさち今日夫婦孫をつとま来る一と親とあらはる

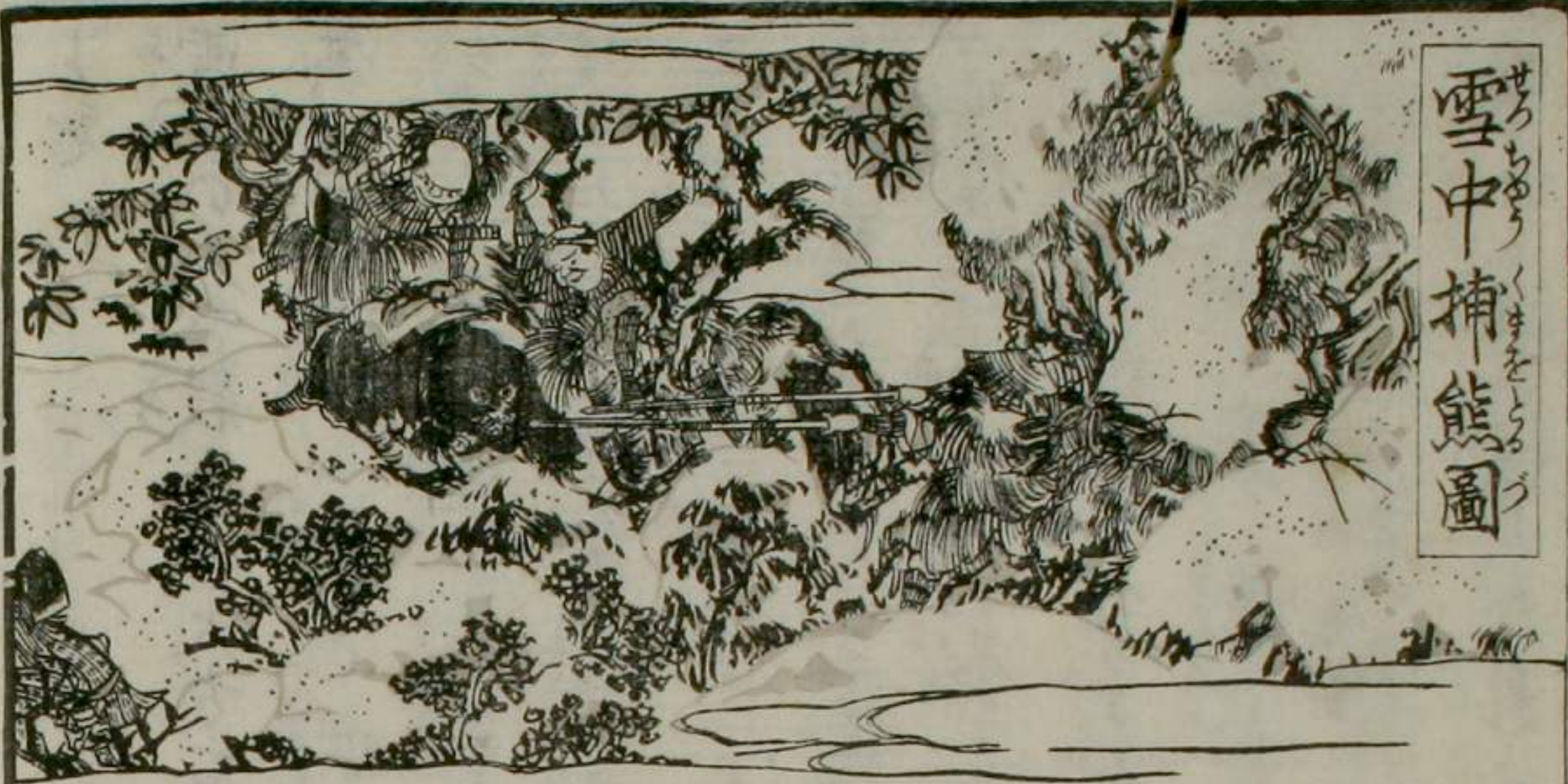
と玉ふまの孫の顔を見玉つさざりよろさびあらんささ小い父孫の顔  
 をや来りまの女人ハいま赤子を見のらるゆあことさうの喜悅あらん逢  
 るる一痛てもよろらん郎も痛ぬ(不可也二人とまりるハ兩親業ぬんさハ  
 飯ぐらどをさの間の啼小乳房々ませつうちつて道をいを地美佐嶋と  
 い原中小到一時天色倏急小震り黒雲空小覆ひけは是雪中夫空を見ま  
 大小驚怖ハ雪吹るんいぐハせんと踉蹌ち暴風雪を吹散り巨濤の岩を越  
 るがごとく飈雪を卷騰て白竜峯小登がごとく朗ちありも掌をうむがごとく天  
 怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭之夫ハ蓑笠を吹とさ妻ハ帽子を  
 吹ちぎさ髪も吹とさ吐嗟といの間小眼口襟袖ハささ之裾も雪を吹いと全  
 身凍呼吸迫り半身ハ已小雪小埋めらまご命のきりあさハ夫婦声をあげ  
 わるいと哭叫ぶも往來の人もろく人家小も遠けさ助る人なく手足凍て  
 枯木のごとく暴風小吹僵と夫婦頭を並て雪中小倒と死けり此雪吹其日の

暮小止次日晴天有りけま近村の者五人此所を通りかりし小の死骸ハ雪吹  
 小埋りまきくえんききも赤子の啼声を雪の中小きけき人々大不怪をきて  
 逃んとするも在り剛気の者雪を掘りてみる小すぐ女の髪毛雪中小頭より扱ハ  
 昨日の雪吹倒さるんり言ふとて皆あつまりて雪を掘死骸を見る小夫婦辛を引  
 あひく死居り見ハ母の懐小あり母の袖見の頭を覆ひまき見ハ身小雪を  
 觸さるゆ多雨や凍死せ兩親の死骸の中あき又声をあげてまきり雪中の死  
 骸あま生るごとく見知る者あり夫婦あることをあり我見をいさりそ  
 袖をかひ夫婦辛をえりまき死す心のうちかひやきてまき若者ら  
 も泪をおと一見ハ懐小いと死骸ハ衰ふつて夫の家小荷ひお江りりりの兩親ハ  
 夫婦娘の家小一宿とのまきあひをりし小死骸をえて一言の詞もく二人が死  
 骸小とりつ死顔小くをわいて大声をあげて哭るハるも憐のありまき一人  
 の男懐より見をいさ一七姑小もてけま悲と喜と兩行の涙をおとけ

とぞ

雪吹の人を殺まきり大方右小類も暖地の人花の散小比く美賞も雪吹と  
 其異こと潮干小遊びく樂と洪濤小隔て苦の如く雪国の難美暖地の人  
 ちのひをらるる連日の晴天も一時小愛く雪吹とるるハ雪中の常其方樹を  
 扱屋を折人家こまき為小苦むや扱拳ごとく雪吹小逢る時ハ雪を掘身を  
 其内小埋まき雪暫時小つり雪中ハくつて温まる気味あり且氣息を漏り  
 死をまねがくるあり雪中を歩まる人陰囊を綿ゆつてむちをまきまき  
 ハ陰囊まき凍て精気尽る又凍死するを湯火をのりて温まき助るりあきと  
 も武火熱湯を用ふる命まきりるのち春暖ふいこまき種病とるり  
 良医も治りごとく凍死するハまき塩を熱て布小包あき膝をあきあき搗火  
 の弱をのりて次第小温る助りるのち病を發せ人肌も温む手足の  
 凍るるも強き湯火あきあきまき陽氣いまき灼傷のごとく腫つ小腐

雪中捕熊圖



農人夫婦逢雪吹圖



京水筆



て指をおもも百薬功ありて是れ我が見る所を記し人示す人の凍死をも  
 手足の龜手も陰毒の血脉を塞ぐの儀湯火の熱を以て温む人精の氣  
 血をたぎけ陰毒一旦小解るといふも全く去れ陰ハ陽小勝ざるを以て陽氣  
 至ハ陰毒肉小暈て腐之寒中兩雪小歩行て冷する人急小湯火を用ふるは  
 已人熱の温るるを以て用ふる長生の一術あり

○雪中の火

世ハ越後の七不思議と称する其一ッ蒲原郡妙法寺村の農家炉中の隅  
 石臼の孔より出る火人皆奇とて口碑ふつて諸書不散見此火寛文年  
 中始て出ると日記に云えまば三百余年の今ハ絶るる奇火中一の  
 奇ハ天舟を出るる一なるはる國の奥沼郡ハ又一ッの奇火を出せり天  
 公の機状の妙法寺村の火と云ふは彼ハ人の知る所是ハ他國の人の志  
 らざる所也まばて小記て話柄とす

越後の国魚沼郡五日町とハ驛小近き西の方小低き山あり山の裾小溝在  
 天明年中二月の頃その山より小童どもあつまりてさぬぐの戲をなして遊倦  
 木の枝をわらめ火を焚てあつたりをりハ其所よりまどハをさて別小火  
 酸と燃わがりけは見曹大ハをさし留四方小逃散けりその中ハ一人の童  
 家小の事仔細を親小語る小此親心ある者あてその所小の火の形  
 状をえさ小いしと消ざる雪中小手を入るべきやの孔をさし孔より三四寸の  
 上小火燃る熱覽かすこ正しく妙法寺村の火のさぬぐと火口小石  
 を入してこきを消し家小のて人小語を雪さすてのち再その所小の火を  
 る小火ののえさるるの小溝の岸ハ火燧をりて發燭小火を点し試小池中小投  
 いまハ池中火を出せし庭燎のごとハ水上小火燃るハ妙法寺村の火よ  
 りも奇とて驛中の人と来りてこきを視るそのち錢小才人ハ他のやと  
 り小温屋をつり篋を以て水をさかてこくハ地中の火を引き湯槽の竈

小燃一又燈火中も代る池中の水を湯不燂一價を以て浴せしむ此湯硫黄の  
 気ありて能疥癬の類を治し一時流行して人群をなせり ○按小地中水  
 脈と火脈とあり地ハ大陰多由多水脈ハ九分火脈ハ一分ありかゝる由多水脈ハ  
 甚稀之 地中の火脈凝結とありかゝる由多水脈ハ九分火脈ハ一分ありかゝる由多水脈ハ  
 眼ハ又之を以て火脈の氣息ハ人間日用の陽火を加へて燃をなすを  
 陰火とのハ寒火とのハ寒火を引不覚の筒の焦ざるハ火脈の氣息も陽火を  
 うけて火となるを以て氣息をとりかゝる由多陽火をうくまは筒の口より二三寸の上  
 小火をうくを以て火脈の氣息の燃るを知るべし妙法寺村の火も是と是  
 余ガ發明ハあり古書ハ據て考得たる所也

○破目山

魚沼郡清水村の奥小山あり高さ一里あまり周圍も一里あまり之山中をへく  
 大小の破隙あるを以て山の名と云山半ハ老樹條をつゝ半より上ハ岩石

疊々として其形竜躍虎怒とて奇々怪々言はるる守藤の左右ハ溪川あり合  
 て滝をなす絶景又言はるる早の時此滝壺ハ雪をまじはるる以驗あり二年四月の  
 半雪の消る頃清水村の農夫ら二十人あまり集り熊を狩んとて此山のや  
 りの破隙の窟をりて所々をへく熊の住處ありと例の番椒烟草の莖を薪ハ  
 交窟ハのぞんで林をへく小窟ハさへ小窟ハ窟の深也多ハ烟の奥ハ至るるんと  
 次日ハ薪を増し山も焼よと焚くハ熊ハをへく一山の破隙をへくより烟をい  
 ごとく雲の起が如くありけしきハ奇異のハをへく熊を狩るハ空へくまうり  
 一と清水村の農夫が語りぬハ此山半より上ハ岩を骨として肉の土薄く地脈  
 氣を通りて破隙をなすハや天地妙々の奇工思量べし

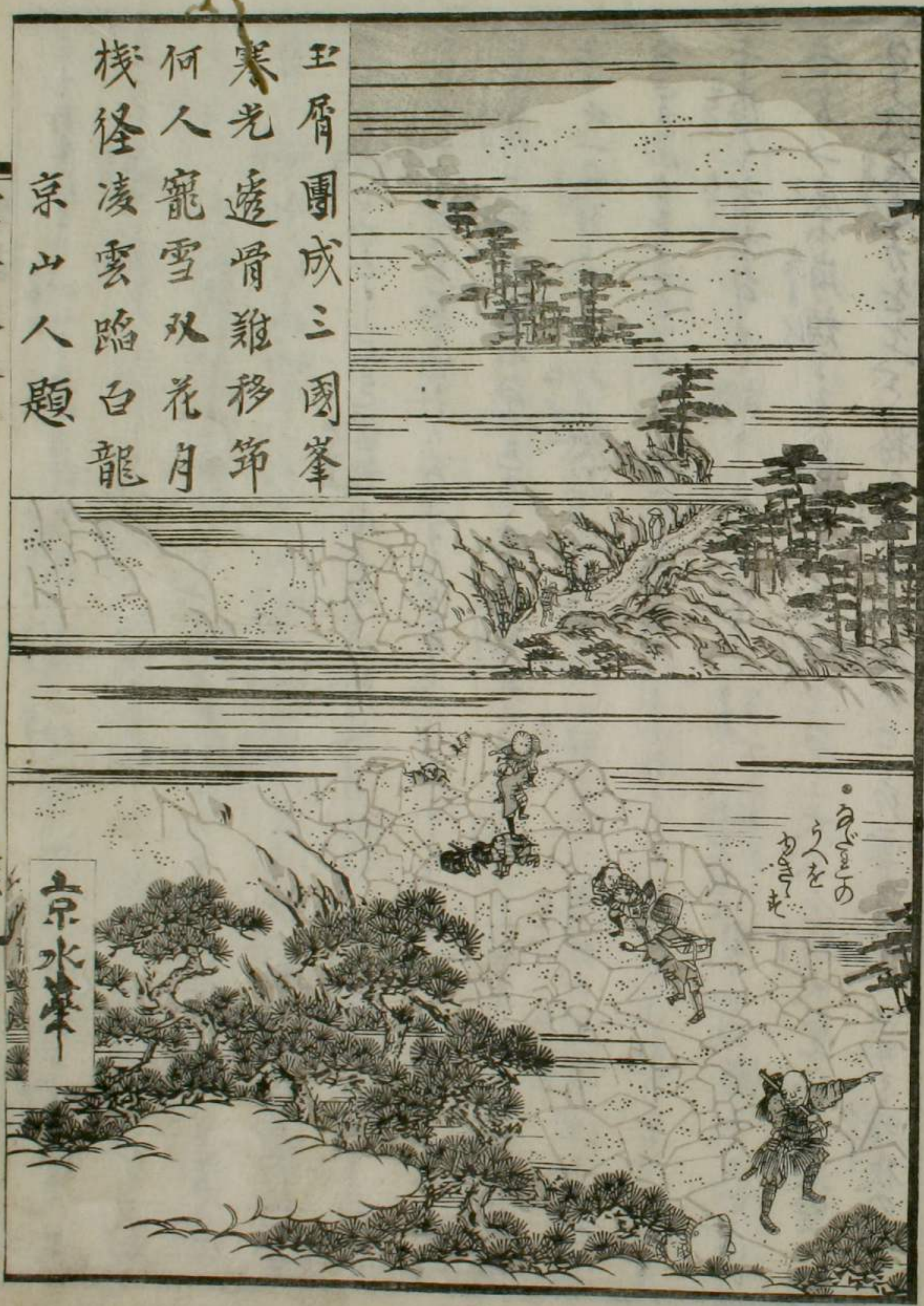
○雪類

山より雪の崩頬を里言ふる雪と云ふ又雪と云ふハ按ふる雪ハ撫下るるを謂と  
 りハ活用してハ山ハ雪の崩頬を里言ふる雪と云ふハ雪類の字を借る用ハ字書ハ類ハ暴風

三國嶺雪顔の上往來の圖



玉屑團成三國峯  
寒光透骨難移節  
何人寵雪双花月  
棧徑凌雲踏白龍  
京山人題



京水亭

ともあまばよく叶つてやまて雪類ハ雪吹ハ双て雪国の難美と云高山の雪ハ里  
 よりも深く凍るも又里よりハ甚一我国東南の山々里ハちらねも雪一丈四五尺ハ  
 久浅一と云此雪こりて岩のごとくあるもの二月のころハ陽氣地中より  
 蒸々解んと云時地氣と天氣との為ハ破て響をうけ一片破て片々破る其ひき  
 大木を折ぐごとくこ雪類んとするの崩之山の地勢と日の照をともよりてな  
 だる処とるべきさる処ありあるは二月ハあり里人ハその時をあり処を  
 あり崩を知り由多あるべきのよハ小數死するもの稀とあるは天の氣候不意  
 中て一定あるべき雪類の下小身を粉ハ碎もあり雪類の形勢ゆるんときハ  
 ろごんとする雪の凍その大より十間以上小ありも九尺五尺ハある大小數百  
 千悉く方をりて削りてさるごとくさるべき方をさるるの幾千丈の山の  
 上より一度ハ崩類その響百千の雷をう大木を折大石を倒是此時ハか  
 ろるハ暴風力をとる粉ハ碎方沙礫のごとく雪を飛せ白日も暗夜の如く

その際ハ筆帝ハ尽一がこ此雪類ハ命を捨ち人命を捨一人我  
 見聞一を次の巻ハ記して暖国の人の話柄と云

或人問曰雪の形ハ出るハ前ハ弁ありて詳之雪類ハ雪の塊るハ碎る  
 形雪の六出ある本形をとりて方形ハいん若て曰地氣天ハ實格一  
 て雪とあるハ多天の四と地の方とを併合て六出をうけ六出ハ四形の  
 裏之雪天陽を離て降下り地ハ飯ハ天陽の四と象とせ地陰の方と  
 本形ハ象とるハ雪類ハ千も万も圭角とるハ解とるハ角  
 四くあるハ陽火の目とてさるハ多天の四と陰中ハ陽を包  
 陽中ハ陰を抱ハ天地定理中の定格と老子經第四十二章曰萬物負  
 陰而抱陽沖氣以為和と云此理を以てある時ハ内美さぬハつもハ  
 内美さぬハ陰中ハ陽を抱とて天理ハ叶とるハ夫ハ代りて理屈  
 をいんハ家内治と云と云理屈ハ過牝鳥且をつとるハ



雪譜卷之七

雪譜卷之七

又家内の陰陽前後して天理不違と云ふ家の亡るも是萬物の天  
 理証<sup>あやま</sup>べしと云ふなりかとのごとしとのひなきは問答唯くとて本<sup>ま</sup>の雪<sup>ゆき</sup>類<sup>るい</sup>  
 悉<sup>ことごと</sup>く方形の<sup>かたがた</sup>の<sup>かたがた</sup>の中<sup>なか</sup>もあ<sup>あ</sup>らざるも十<sup>じゅう</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>て七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>の方形をう<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>故<sup>ゆゑ</sup>  
 小<sup>こ</sup>此<sup>こ</sup>説<sup>せつ</sup>を下<sup>くだ</sup>せり雪類の圖多<sup>おほく</sup>く方形<sup>かたがた</sup>不<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>其<sup>その</sup>七<sup>しち</sup>八<sup>はち</sup>をとりて換<sup>か</sup>  
 様<sup>よう</sup>を為<sup>な</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>

北越雪譜初編卷之上終



